

---

# 転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

餓鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

### 【Nコード】

N6851W

### 【作者名】

餓鬼

### 【あらすじ】

ある日死んだ俺は神に転生させられ気づいたらISの世界に居た。

もし、誤字などがありましたら指摘してください。

## 転生だと！（前書き）

この小説は作者の思いつきで書いたものなので悪しからず。

転生だと！

皆さんはあるだろうか？ 死んで目が覚めたら阿部さん似の人が目の前に居る恐怖を

「俺、ホモじゃないから許して」

俺は土下座をしたぜ、それもジャンプして。

「いや、俺、ホモじゃないから」

なんだと！ こんなに似ているのに、青いつなぎを着ているのにホモじゃないだと！？

「さつきから、すべて聞こえてるのだが」

「読唇術だと」

この阿部さんやりよる。

「すまない」

いきなり、イケメンボイスで謝りだしたぞ？ この阿部さん。

「いきなり、なんですか？」

「すまない、俺の名は阿部だ！」

やっぱり、阿部さんだああああああああああ！！

「俺は創造神だ」

「中二病乙」

「俺は、お前の命を無くしてしまった」

スルーだと……命を無くした、俺ってこいつに殺されたの？

「そこで、お前に新たな人生を生きてもらう」

「ありきたりな設定だな」

「お前には、ISの世界で折原臨也になってもらう」

「おい、なぜここで『デュラララ！！』のキャラが出てくる」

「俺が好きな小説のキャラだから？」

コイツの頭は大丈夫か？

「そうと決まったら、さっそく転生だ」

いきなりすぎないか？



## キャラ設定

名前：折原おりはら 臨也いちや

旧名：東條ひがしじょう 秀樹ひでき

見た目：『デュラララ!!』の臨也そっくりに転生したため性格までもが臨也そっくりになってしまった残念な元高校生。

人間関係：織斑姉弟と篠ノ之姉妹とは幼なじみ、一夏と篤とは同い年、千冬は静雄的な立ち位置に着いただって、ちーちゃんって呼ぶのが面白かったからwww、束とはとても仲がいい似た者同士だから？

年齢：永遠の18歳（15歳）

今の所ヒロインは千冬さん、束さん、楯無さんの三人ですかね。主人公は転生してもしなくても鈍感です。こんな感じですがISの設定は専用機が出てきてから書こうか書かないか迷っています、名前だけ発表します『デュラハン』です。この名前は神が付けたことになります。設定もチートです。

ヒロインの追加をします、ギロさんの案で山田先生を追加します。

## 計画どおり！

転生してから10年がたった。今は立派な高校受験の日、俺はいつものように椅子に座ってパソコンを弄っていたら携帯に着信がきた。

「どうしたんだい、一夏くん」

この喋り方は面白いな。

『イザヤ、すまないけど道を教えてくれないか？』

気づいたかい、皆俺の事を臨也ではなくイザヤと呼ぶんだ、何でだろうね？

「次、見た扉を開けるといいよ」

『ありがとう』

思ったけど、一夏くんは人を疑うことをしようね。

「おっと、チャットを止めてしまった」

甘楽『みなさん知っていますか？』

ウサギ『なにになに？』

鬼『詰まらんかったら、叩くぞ』

甘楽『いやん、鬼さん怖い』

ウサギ『怖いよ』

鬼『早くしろ(怒)』

甘楽『実は、男がISに乗れるっていう都市伝説』

鬼『よし、しばきに行くか』

鬼さんが退室されました

秘密モード

ウサギ『いつくんのこと？』

甘楽『教えません』

ウサギ『毎日が楽しくなりそうだねイザくん』

甘楽『やっぱり、日常より非日常の方が快感だね』

ウサギ『M発言かな？』

甘樂さんが退室されました

ウサギ『落ちちゃった、なら私も』

ウサギさんが退室されました

現在、チャットルームには誰もいません  
現在、チャットルームには誰もいません

「ここだな」

俺はイザヤに言われた通りに扉を開けるとそこにはISが置いてあった。

「何でここにISがあるんだ」

俺は興味本位でISに触れると、ISが光りだした。

「何だよこれ」

「何をしてるんですか」

後ろから女の人たちが入ってきた。

「ISが起動している」

今、何て言いましたか？

「男がISを起動させるなんて」

イザヤああああああ、お前、嘘言っただな！

## 新学期の準備（前書き）

チャットルームでの話し方を変えます。

甘樂は《》

鬼『』

ウサギ「」

で行かせてもらいます。

## 新学期の準備

「おや、もうニュースやってるじゃないか」

そのニュースは一夏くんがISに乗ることができるとニュースだった。

「俺はこれからはどうやって原作に介入しようかな」

『私に用かい』

突然目の前に阿部さんの幽霊が目の前に現れた。

「やあ、どうしたんだい？」

『反応が鈍いな』

何を言ってるんだろうな。

「用が無いのなら、お引き取り願おうかな」

『君にコレを渡しに来たんだよ』

渡されたのは小さなナイフだった。

「これはISの待機状態かい？」

『驚かないのかい？』

転生したのだからコレぐらいは予想はつくだろう。

「只の勘だよ」

『なら、これは渡して置くよ。ついでにIS学園に編入届け出して  
おいたから』

「あなたはいつも勝手ですね

でも、これで原作介入がしやすくなったな。

『それでは私はこれで失礼します、アニメが見たいので  
頭の中は子供なんだね。』

「それじゃ、俺は原作を楽しむよ」

阿部さんは闇の中に消えていった。

「いよいよだね」

俺は部屋の窓から外の景色を見ながら叫んだ。

「楽しみだなあ。楽しみだなあ。楽しみだなあ。この街は俺でも知

らない事がまだまだ溢れ、生まれ、消えていく。これだから人間が集まる街は離れられない！ 人、ラブ！ 俺は人間が好きだ！ 愛してる！ だからこそ、人間の方も俺を愛するべきだよねえ」  
このセリフは一度でも良いから言ってみたかったんだよねえ。

チャットルーム（深夜）

苦労人さんが入室されました

「こんばんわー」

《こんばんわ》

「ばんわー」

「やあー」

《苦労人さん、今日の昼間はどちらに行かれていたんですか？》

「高校受験に行っていました」

「落ちたらいいのに」

「酷くないですか！」

《皆さん、酷いですよ。一応、応援しましょうよ》

「甘楽さんも苛めるんですか！」

《「面白いから（ですよ）」》

「ここには、俺の敵しかいないのか」

「今更だねえー」

《そこは、隠しておかないといけませんよ》

「あんたらは、悪魔かあ！ それよりこれから、あまり来れないと思います」

《彼女が出来たんですか？》

「早く吐け！」

「違いますよ、高校からタウンージぐらいの厚さの資料を渡されただけで読まないといけないんです」

《それで、思い出しました。今日なんと男のIS操縦者が現れたそ

うですよ》

苦勞人さんが退出されました

『拗ねて帰ったな』

「暇だぁ」

《なら、私たちも落ちましようか》

甘樂さんが退出されました

鬼さんが退出されました

ウサギさんが退出されました

入学？

いやあ、この日が来るとは思わなかったよ。門の前で待機しておけと言われ待っていたら、迎えに来た教師がちーちゃんだとはね。

「久しぶりだね、ちーちゃん」

臨也の顔では滅多に見ることが無いスマイルであいさつをしてみました。

「いーざーやーここでは、織斑先生だ！それに、制服はどうした  
！」

俺の格好はいつものフード付の黒いコートを着ているよ。

「いやーあれね、来るときにステーキのたれがこぼれてね」

「まあ、今日は許そう」

ちーちゃんの顔は少し赤くなっていた、熱でもあるのか？

「それよりさあ、早く教室に行かなくていいのかい？結構時間立  
つてるけど」

「むっ、そうだな行くぞ」

なんか機嫌悪くなったけど何でだ？

「楽しみだな」

「何がだ？」

「だってさ、ちーちゃんや一夏くんがいるんから楽しくなかった面  
白くないからさ」

「折原には厳しくいくからな」

「それって、愛のムチかい？」

「あ、愛だと！」

はは、ちーちゃんを弄るのはとっても楽しいな。

「教室に着いたよ」

「私が呼ぶまでここで待っておけよ」

「分かってるよ」

俺はそこまで子供じゃないんだからきつく言はないで欲しいな。



「俺の席は何所ですか？ 山田先生」

「ここは、あえて山田先生に聞いて見たらちーちゃんが凄い目で見つちを見てきたんだけど。」

「お、折原君は窓際の一番後ろです」

「ありがとうございますね」

笑顔でにつこり

「ノノノいえ、これぐらいは」

えっと、ここだったよね。

「よろしくね、イザイザ」

隣の子はのほほんさんだったよ、このキャラ好きなんだよね見ていると楽しいからね。

「よろしく、本音ちゃん」

「何で名前知ってるの」

「俺は情報屋だからね」

さて、ラウラが来るまでは原作には沿って行きたくないんだけど、セシリアだけボコボコにしたいんだよね。高飛車キャラってこの時代じゃ古いしね、この際あの性格をどうにかしてほしいよね。

「折原、お前はわかるな」

原作だと一夏くんがバカをやったところだね。

「なんら、説明しましょうか？ ちーちゃん」

「おーリーはーらー学校では織斑先生と呼べ！」

うわ！ 怒って、教卓を投げてきたよ。後ろの壁に教卓が突き刺さってるよ。

「嫌だなあ、ただのスキンシップじゃないですか」

「そこを動くなよ、臨也！」

ウソだろ！ 何もない空間から打鉄うちがねのブレードが出てくるんだよ！ あんたは何所のデイスード使いなんですか！

「なら、捕まえてごらんよ。ちーちゃん」

窓から脱出して全力で走ってるのだが、後ろから追ってくる鬼はブレードを持ったまま飛び降りやがった。

「ふう、助かったか」

「あれ、なんているの〜」

「窓の溝に掴まってやり過ごしてんだよ」

「この高さから落ちれば足の骨は折れるだろう。」

「臨也！ お前！」

「無傷だと！ しかも、壁を走っているぞ！ この人外が！」

「やっぱり、ちーちゃんを弄るのは楽しいなあ」

笑いながら廊下を走り安全地帯を探したがちーちゃんに捕ったが無傷で帰還したよ。

「いい運動になったよ」

この時、クラスメイトが思ったのは何で、あんな状況で楽しめるのかだった。

「それと、ISの説明だったね　これぐらいは普通に知ってますよ」

「す、すごいですね。先生まだ、そこまで知りませんよ」

「すごいねイザイザは何でも知ってるんだねえ〜」

「何でもは知らないよ。知ってることだけだよ」

このセリフは違うアニメだが言ってみたかったんだよねえ。

久しぶり！

楽しい鬼ごっこが終わり、休み時間になった。

「イザヤ、助けてくれ」

一夏くんは両手を合わせながらお願いをしてきた。

「なら、お金を払ってよ」

俺は手で二を指で示した。

「千円で何とかしてくれ」

「しょうがない、今回だけだよ」

「サンキュー」

はあ、なんで君はそんなにバカなんだい。

「ちよつと、いいか」

話しかけてきたのは、篝ちゃんだった。

「久しぶりだね、篝ちゃん」

「久しぶりだな、イザヤ」

「見違えたよ、可愛くなつたね」

「そ、そうか。そうなんだな」

篝ちゃんの顔は赤くなっていた。

「そつだ、優勝おめでとう」

「何で知ってるんだ！」

そこで、大声を出さないで欲しいな耳が痛いよ。

「俺は情報屋なんだから、それくらいは知ってるよ」

「まだ、お前はそんな事をやってるのか？」

「俺は外より家で作業する方がましなんだよ」

「その割には体力あるよな」

前世の体力がそのまま残っていたなんて言えないしね。

「おや、チャイムが鳴ったから戻ろうか」

「逃げるなよ」

一夏くん、止めた方が身の為だね。

「ほら、担任がちーちゃんだからさ」

その言葉で意味が分かったのか、一夏くんはすんなりと袖から手をどけてくれたよ。

「俺のせいで殺しかけてごめん」

一夏くんはあのやり取りがトラウマになったんだね。

「俺はあれぐらいじゃ、死なないよ」

「ごめんな、千冬姉が」

パソコン！

「学校では織斑先生だ」

主席簿であんな音がでるなんて、どんだけ力が強いんだよ。

「折原、いらんことを考えるなよ」

鋭い目でにらんできた。

「どうしたんだい俺を見つめて、何かついてるかいちーちゃん」

「み、見つめてどいない」

また、赤くなった熱でもあるのかな？

「俺は少し、しんどいんで保健室に行きます」

ウソだよ、授業なんて受けなくてもできるもん。

「そうだな、いつて来い」

さてと、廊下に出たけどどこに行こうかな。

「ねえ、その君今は授業中だよ」

黄色いネクタイをしているから二年だろう、ってあの顔は楯無さんじゃないか。

「やあ、生徒会長の更識楯無ちゃん」

平然と答えてみた。ここで、変な行動したらすぐにはれるからな。

「初めまして、折原臨也くん」

俺たちは向かい合いながら微笑んだ。

「ちよつと、来てくれるかな」

「よろこんで」

楯無ちゃんについていくと生徒会室の中まで案内され、扉の鍵を閉められた。

「なんで、鍵を掛けるんだい」

「あなたに、依頼したいの」

更識に仕事をもらうが更識の人間がしてくるとは意外だな。

「内容によるかな」

「織斑一夏の秘密を調べてくれるかしら」

「20万で手を打とうかな。それが、妥当だと思うんだけど」

「分かったわ」

契約は完了した、俺の仕事が終わるまでは油断ができないな。

「疲れたよ」

「それじゃ、お茶を飲みましょうよ」

いきなりゆるくなつたからついていけないな。

「それじゃ、食堂にでもいこうか」

俺は紳士がエスコートするみたいに右手を差し出した。

「あ、ありがとう」

なんだか、フラグをこの頃立ててるように思うのは気のせいかな？

「そつだ、俺を生徒会に入れてくれないかな？」

「いいわよ」

即答された、本当にこの人は頭が良いのか？

「それなら、役職は何かな？」

「あなたの實力なら、副会長だともうわよ」

「なら、これからは授業をサボる為に生徒会室を使わせ貰うよ」

「放課後も来てもらわないとダメよ」

それにしても、この人からは危ない感じがしないな。

「それじゃ、君の顔を見に来るよ楯無ちゃん」

「／／／お願いね」

その後も、話しながら食堂に行き、お茶を楽しんで教室に戻つたら篝ちゃんとちーちゃんに殴られたよ頭を俺はないかしたかな？

部屋に行ってみようか？

放課後、俺はなんとなく一夏くんの家庭教師をしていた。

「これぐらいなら、分かるかい？」

俺はISの簡単な資料を見せながら言った。

「何となく」

「おいおい、それは勘弁してくれよ」

今、見せているのは『サルでも分かる簡単ISの知識』なんでもんなものがあるかって。そんなのは簡単だよ。最初からこうなる事は分かっていたからさ。

「何で、俺はあれを捨てたんだ！」

「バカだから」

「そうなんだけど、イザヤに言われると傷つく」  
楽しいな。

「まだ、いたんですね。よかった」

あれ、このイベントは部屋の鍵ですか？

「どうしたんですか？」

「部屋の鍵を渡しに来ました」

「俺の部屋は何所ですか？」

「お前のは無理に調整して、寮の最上階にした」

いきなり、ちーちゃんが現れて、一夏くと真耶先生が驚いているよ。

「さすがちーちゃん、俺が好きなのところを知ってるね」

「なんで、最上階なんですか？」

「折原は人の下に見られるのが嫌いなんだよ」

「子供みたいですね」

「そうさ、俺は性格は子供なんですよ」

いじけてないよ、だって本当の事を言ってるのだから。

「じゃ、俺は部屋に向かうよ」

さて、鬼の先生から早く離れよう。

「道草しないでくださいね」

この距離でできる訳がないでしょ。

「それにしても俺の部屋はどれくらい広いのかな」

ドアノブを回すと開いていたので入ると目の前に現れたのは。

「お帰りなさい、お風呂にする、それともご飯、それとも私？」

目の前に裸エプロンの楯無ちゃんがいた。たぶん、水着を着てるよな。

「それじゃ、どうしようかな」

ドアを閉めて鍵を掛けた。

「よし決めた。君にしようかな」

俺は楯無ちゃんを押し倒して馬乗りする。

「え！」

楯無ちゃんはいきなりの事で驚いていた。

「君が誘ったんだよ。やめなんてしないからね」

俺は微笑みながら言った。

「／／／／／」

楯無ちゃんは目を閉じた。

カシャ！

「良い顔が撮れたよ」

俺の手にはデジカメがあった。

「覚悟して損した」

「可愛い顔してたよ」

「け、消して／／／／」

凄く照れていて可愛いな。

「なんで、ここに居るんだい？」

俺はまだ、馬乗りの状態で聞いてみた。

「生徒会長の特権で相部屋にしてみました」

だから、お風呂があり、トイレがあり、台所があるとても便利な部屋なんだね。

「これからよろしく」  
微笑みながら言った。  
「それより、どいてくれない？」  
「嫌だよ、今日は疲れたからこのまま寝ようかな」  
耳元でささやいてみた。  
「ひゃあ！」  
「さて、ベッドで続きをしようか」  
俺は楯無ちゃんをお姫様抱っこをした。  
「本当にするの？」  
「するわけないじゃん。だって、俺はまだ18歳だからね」  
「何歳ならいいの？」  
「満18歳」  
「今何歳なの？」  
「永遠の18歳だよ」  
「おかしくない」  
「おかしくないよ、18つたら、18歳なんだよ」  
「永遠の18は俺のだけが使っていいんだよ。」  
「さて、寝ようかな」  
「別々に？」  
「一緒に寝たかったら、寝たらいいよ」  
この夜は楯無ちゃんと一緒に寝ました。

## クラス代表？

俺は朝起きるとすぐさま着替え食堂に行った。なぜなら、昨日は変なテイションでいろいろやってしまったからな。

「おはよう」

俺が挨拶したのは篝ちゃんと一夏くんだよ。

「おはよう」

「……おはよう」

なんだか篝ちゃんの機嫌がよくないな。

「一夏くん、何かあったのか」

俺は一夏くんの耳元でささやいた。

「昨日からああなんだ」

「一夏くん何かしたのかい」

「部屋に行ったら、バスタオル姿の篝が出てきたんだよ」

「諦めて警察に自主しようか」

「覗きじゃ、ないから」

忘れてたけど俺の格好は昨日と一緒なんだよ。

「それにしても、何で制服じゃないんだ」

「皆と同じ服なんか着たくないから」

「その格好、小学生からかわってないな」

「そうだね、中学は行ってないからね」

「まじかよ」

「池袋に居た時は情報屋の仕事で大変だったんだよ、それに妹達と同じ学校に行くなんて嫌だからね」

「お前の妹嫌いは治ってないな」

妹なんて俺にとって邪魔な存在だからね。

「それより、チャイムが鳴る前に教室に行こうか」

気づいたらあと五分で予冷がなる前だった。

「今からSHRを始める前にクラス代表を決める、誰か立候補しろ」

ちーちゃんのその発言を俺は待っていた。

「一夏くんが良いと思いまーす」

「それがいいね」

本音ちゃんも賛成してくれた。

「なに、それなら俺はイザヤを推薦する」

「良い度胸だね、一夏くんが俺に勝てるでもいつのかい？」

「生意気言つてすみません」

一夏くんは魂がこもった土下座をした。

「折原と織斑の二人だけか」

「納得いきませんわ」

来たか、高飛車アホ女！ 君が名乗り出ることを俺は待っていた！ 俺は君のその自信に満ち溢れた慢心な心をぶち壊したくてしようがなかったんだよね。原作読んでいて近接が弱いのが攻撃していくようなバカにはいい薬だが、俺は人の心を折るのが最も楽しい遊びなんだよ。

その間もセシリアと一夏くんの言い争いになっていた。

「それなら、俺は君の心を折ろうかな」

席から立ち、どこからかナイフを右手にもった。

「勝負は来週の月曜日だ。折原、ナイフを早しまえ」

「何言ってるんですか、これはISですよ」

「え！ 折原君はもう専用機持ってるの」

「俺はとつても信頼しているISの技術者を知っているからね」

一応このISは東ちゃんが製作した、第四世代のISなんだよね。

「これで、君と俺は同等じゃなく、俺の方が強いよ高飛車さん」

「私だって専用機を持っていますわよ」

「その話じゃないよ、俺が言ってるのは君と俺の力の差だよ」

「何言ってるの折原君、男子が強いには昔の話だよ」

その言葉を聞いて俺は笑い出した。

「アハハハハハ、俺は他の人に見られるのが嫌いなんだよね。だから、そんな意味が分からない事はぶち壊したくなるんだよね」

「いいですわ、あなたのその自信を壊してやりますわ」  
「やってみなよ」

これは来週が楽しみだな、クラス代表の件は生徒会の仕事が大変やらでパスすればいいしね。

「楽しみに待っているよ」

そのまま、休み時間に入った。

「一夏くん、頑張れ」

「お前もだろ」

「俺は勝てるから良いんだよ」

「はあ、俺はどうしようかな」

「箒ちゃんに剣道でも教えて貰ったら？」

「なんで、そこで私が出てくる！」

いつの間にか後ろにいて驚いたよ。

「教えてくれないかな、箒ちゃん」

いつものように耳元で囁いた。

「イザヤが言うのなら仕方がないな」

ニヤリ！ これで、すべての物語が俺の手のひら操れるな。

試合は迅速に行うべき(前書き)

そろそろ、前期末テストなんだよね。赤点採ったら留年決定なんだよね。

「勉強したらどうなんだい」

「するよ、保健と製図だけ。」

「なんで、保健なんだい」

「保健しか点が取れないから？」

「前はなんてんだった？」

「満点に決まってるじゃないか？」

「変態だね」

「残念だがそこが今回のテスト範囲なんだ！」

「誰か、作者に勉強をするように説得してくれ」  
「だが、断る！」

## 試合は迅速に行うべき

セシリアちゃんと一夏くんの試合が終わった。なに、時間の進みが早いってそんなのきまつてるじゃないか！ 男の練習風景を見て喜ぶ男子がどこに居るんだ！

「お前はバカだな」

ちーちゃんは一夏くんを苛めているよ。

「ちーちゃん、暇だから先に行って準備していいかな？」

「そうだな、オルコットは装備の補給があるからな」

俺はすぐさまISを展開しアリーナに行こうとした。

「それが、イザヤのISか」

俺の格好はいつもの服の上に黒く薄い装甲が纏っているだけだ。

「それにしてもそれがISスーツなんて」

「この格好が落ち着くからね」

特注品なんだよ、それは置いて早くアリーナに行こう。

「アリーナに来たけど何しようかな」

まずは、武器の確認『影』だけだった。それにこの武器は色々な形状になる事が出来るみたいだ。

「楽しい事を始めようかな？」

何をしたかは、戦闘が始まってからのお楽しだよ。

「これで、配置は完了したね」

「待たしましたわ」

うわ！ 高飛車が現れた。イザヤの行動は戦いを始める。

「待たせないでくれよ」

俺は影をナイフの形状にして構えた。

「そんな武器で勝てると思ってるのですか？」

「勝てるさ」

ブザーが鳴ったとともにセシリアがスターライトmk?を構えるがそれは撃つ前に粉々になった。



壊れていた。

「君じゃあ俺の快樂にはならない」

その言葉を吐き、ビツトに戻った。

「ただいま」

「やりすぎだ！」

一夏くんの声が聞こえてきた。

「今度は一夏くんが俺の快樂を満たしてくれるのかい？」

「あれは何だ！」

「うるさいな、俺は普通に戦っただけだよ」

「お前は加減が出来ないのか」

「手加減は無しだからね」

「やっぱりお前はおかしい！」

これでいい、俺は初めから君とは相性が悪いからね。それに、この性格は君が最も嫌いな性格だからね。だから俺はこの性格のまま生きてきたんだよ。

「それじゃ、俺は部屋に戻るよ」

そのまま寮に降りたっちゃんて遊び寝た。

## 遊びはゆっくりと

「クラス代表は織斑一夏に決まった」

「なんで、俺なんですか？」

一夏くんは驚きながらちーちゃんに聞いた。

「それは、オルコットのISは修理に出しているからな」

「なら、イザヤなら」

「俺は生徒会で忙しいからパスしたんだよ」

「なんだと！」

だって、俺はめんどくさいのはパスなんだよね。

「それじゃ、俺は生徒会の用があるから失礼します」

教室から出て、向かった先は生徒会室ではなくIS整備室に向かった。

「ここに、彼女がいるのか」

さて、ここから俺がISの物語を壊していこうか！

「いるかい、更識簪ちゃん」

俺は部屋に入り女の子に話しかけた。

「……あなたは誰？」

「警戒しなくていいよ。俺は折原臨也、君の恨みの対象を嫌っている人物さ」

「……恨みの対象？」

俺は微笑みながら言った。

「織斑一夏……」

その言葉は静かに整備室に響いた。

「……用は何？」

「君に今度、行はれるクラス対抗戦に出て貰おうと思うんだよ」

「……まだ、ISは出来ていない」

「その点は問題ないよ。ここに俺が各国のIS情報をクラックして纏めた物を君にあげるよ」

俺はそのままUSBを彼女に渡した。

「……なんで、くれるの」

「俺は一夏くんの事が大っ嫌いなんだよ。だから、君に手伝って欲しいからね」

「……自分でしないの？」

「クラスが一緒だから出来ないんだ。それに、俺は君に興味があるからね」

「……興味？」

「そうだよ。俺は君がたっちゃんの妹だから日本代表候補生になったとは俺は思はない、それは君が手に入れたものだと思っ」

「……私の實力？」

「そう、君の實力だよ。だから、君の力を俺に貸してくれないかな。俺は手を伸ばしながら言った。

「俺には君の力が必要なんだ」

「……そんな事、初めて言われた」

「力を貸してくれるかい？」

「うん……」

「それじゃ、よろしくね、簪ちゃん。俺の事はイザヤって呼んでいいから」

「わかった……イザヤ」

「俺と君は同じ目的をもった仲間だよ」

「仲間……」

「俺もISを作るのを手伝うから必要な時にここに連絡をいれなよ」  
俺は連絡先とチャットのURLを渡した。

チャットルーム（深夜）

甘樂さんが入室されました

《皆さんのアイドル甘樂ちゃんが帰ってきましたよ》

『どうにかならんのかその口調は』

「お帰り〜寂しかったよ」

《ここ最近忙しかったので来れませんでした》

『いいから、その口調をどうにかしろ！ 虫唾が走る』

《酷いな！鬼さんは怒りん坊さんなんですか？》

情報さんが入室されました

《新顔さんだね。はじめまして》

(初めまして)

「初めまして〜」

『初めてだな、私は忙しいから落ちる』

鬼さんが退室されました

《あの人はほつといて、ガールズトークを楽しみましょうよ》

「甘甘、やっぱその口調は変だよ」

(甘樂さんの性別はどちらなんですか？)

「男だよ」

《違いますからね、ウサギさんウソを教えないでください》

(面白いですね)

「これがこのチャットのたのしみところだね〜」

《ウサギさん、漢字に変換してくださいよ。読みにくいです》

(そうですねwww)

「酷いよ、私だって忘れることだってあるんだよ！ 怒ったから今

日は帰る(怒)」

ウサギさんが退室されました

《ほとんど帰ったので私たちも落ちましようか》

(すいません)

《謝らないでください》

情報さんが退室されました

甘樂さんが退室されました

「物語は俺の手で作り変えるよ」

「どうしたの？」

「これから、楽しい事がはじめるかね。 たっちゃん」

微笑みながら言った。

「どんなことかしら」

「とても、楽しい事だよ」

「それは楽しそうね」

それはとても楽し楽しい原作崩壊の第一歩だよ。

## 作戦は計画的に(前書き)

皆さんのおかげでお気に入り件数が3桁になりました。とても嬉しいです。

## 作戦は計画的に

今日は簪ちゃんの所に遊びに行こうかな。

「ISの出来はどうだい？」

「ギリギリできるか分からない」

簪ちゃんはディスプレイから目を離しこちらを向いた。

「別に今回が駄目でも学年別トーナメントがあるからゆっくりと作  
つていこうか」

「何とか間に合わせてみせる……」

「なら、この情報は持つてきて正解だったかな？」

俺は資料を簪ちゃんに渡した。

「こんなことして…大丈夫かな……」

「大丈夫、それは俺が信頼する人からもらった物だから」

そう、頭のネジが何本か抜けた人にね。

「なら、頑張る」

「そうだね。あと、数日しか無いからね」

最近、二組に転校生が来たと言っていたな。俺には全く関係が  
無いし、ただの中国代表候補生なんていても、いなくても変わらな  
いからね。

「イザヤも手伝った」

「いいよ。それに、俺が頼んだことだからね」

俺が手伝う頃にはほとんどが完成していて、原作よりも早くでき  
るのではないかと思った。

「……あのデータすごく役にたちました」

「クラックしたかいがあつて良かったよ」

「本当に私で良いんですか？」

「自信が無いのかい？」

計画に支障がない程度に頼むよ。それに、近頃ドイツからあの子  
が来るからね。

「……少しだけ」  
「大丈夫さ、君ならやってのけるって信じてるから」  
「あ……ありがとう」  
「簪ちゃんの顔は少し赤かったけど、この部屋って暑いのかな」  
「さて、早く完成させて試験動作をしないとね」  
「試験動作をしないとどこがダメなのか全くわからないからね」  
「あと数時間で完成する」  
「やっぱり、この子に頼んで正解かな」  
「俺はアリーナの貸切を教師に頼みに行こうかな」  
「出来るの？」  
「出来るさ、俺は生徒会副会長なんだよ」  
「せ、生徒会!?!」  
「お姉さんのことが引つかかるのかな」  
「安心しなよ、俺は君を裏切らない」  
「俺は静かに整備室から出た」  
「……あの人はとっても優しい」  
「簪の声は整備室に静かに響いた」  
「どうしたんだい？ たつちゃん」  
「整備室からでたら、たつちゃんがいた」  
「一夏くんの資料をもらいにね」  
「忘れていたよ、コレが彼に関する資料だよ」  
「USBをたつちゃんに手渡した」  
「お金の方は口座に振り込んでおいたから」  
「俺は用事があるから行くよ」  
「じゃあまた部屋で」  
「俺は職員室に行くところーちゃんに怒られた」  
「なんで、お前は授業に出ないんだ!」  
「面倒だから?」  
「なんで、疑問形なんだ!」  
「怒るなよちーちゃん、怒ると婚期逃がすぜ」

「よ、余計なお世話だあああああああああああ！」

「怒りながら教師用の机を投げないでくれよ」  
「当たると死んじゃうよ。」

「いざや！」

「第二アリーナに借りるから誰も入れないだね」

「逃げるな」

「聞こえない。なにも聞こえないな」

「準備は出来たかい」

「今、出来た」

帰った時には準備までできていた。これはさすがに驚いた。

「さて、試運転に行こうか」

第二アリーナに行くと三人の影が見える。

「その三人すまないけど、出してくれないかい」

「申請している人がいたんですかすみません」

「誤ったのは一夏くんだった。」

「今から忙しいから早くしてくれよ」

「つて！ イザヤかよ」

「そこで驚かれても困るよ。」

「何かするのか」

「篝ちゃんが話しかけてきた。」

「今からISのテストをするからね」

「丁度その時、簪ちゃんが来た。」

「ほらね」

「でも、ここは私たちが先に使っていたのですわ」

「セシリアが何か言ったがこんな負け犬に構っている暇はあまりないから早く出てもらうか。」

「負け犬は静かにしといてくれないかな？ それに、ここじゃなく

ても練習は出来るんだし」

「その言い方は無いだろ、イザヤ」

「五月蠅いな、俺はその負け犬には全く興味が無いんだよね。て

か、見ているのが嫌なんだよね見苦しい」

「イザヤ、言い過ぎだ」

「言い過ぎ？ 何言ってるんだい、敗者は勝者に従うのがルールじゃないか」

「なら、今から俺と戦え！ 負けたらセシリアに謝れ」

「しょうがないな。簪ちゃん、三分だけ待つといてくれるかな」

一夏くんはすでにISを纏って戦闘態勢に入っていた。

「面倒くさいな」

俺は瞬時にISを纏った。

「始めようか」

今回は『影』を大鎌に変えた。

「それで勝てるのか？」

「戦闘中に敵に話しかけるもはいけないな」

俺は大鎌を振るった。

「そんなもの」

一夏くんは雪片式型で受け止めようとしたが……

「それは、無駄だよ」

大鎌は雪片式型をすり抜けた。

「なに！」

「終わりだね」

一夏くんはアリーナの壁に激突した。

「さて、敗者は速やかに退場してもらおうか」

簪ちゃんがこちらに近寄ってきた。

「今のはなんだ」

「俺の武器は『影』なんだぜ、すり抜けるぐらいは当たり前だね」

「なぜ、あそこまでする」

「力の差を見せるため？」

「昔のお前はそんなんじゃないかった」

「それより早く出てくれよ、目障りだ」

これでやっと試運転ができる。

「あれでいいの？」

簪ちゃんは近寄り呟いた。

「心配してくれてありがとう」

打鉄式式の試運転は成功に終わり後は武装の細かなチェックだけになった。

「これで俺の作戦は上手くいく」

「手伝ったくれて……ありがとう」

「これは君の力で作ったんだ。俺は何もしていない、また明日」

俺は笑いながらアリーナを後にする。

**やりすぎはじ注意下さい！（前書き）**

テスト一週間前になったので投稿するのが遅くなります。

やりすぎはご注意下さい！

それにしても、世界は詰まらな。俺はもっと楽しい世界が見たいな。

「イザヤ、準備ができた」

簪ちゃんは打鉄式を纏っていた。

「これで、君の実力を見せる舞台が整った！」

俺はアリーナの外で喜びながら叫んだ。

「さて、この戦闘を否定しようか！」

上空からアリーナに砲撃が降ってきた。

「行こうか、簪ちゃん」

「……うん」

俺はISを展開しアリーナの壁を壊しながら進んで行った。

「脆いなこれじゃ直ぐに侵入されるよ」

アリーナの最後の壁は少し固かったが呆気なく壊れた。

「簪ちゃん、俺がサポートするから楽しんできなよ」

簪ちゃんはゴーレムにミサイルを撃ち込んだ。

「何しにきたんだよ、イザヤ」

一夏くんが寄ってきた。

「何って、遊びにきたんだよ」

「ふざけてるのか！」

「ふざけてないけど？」

「じゃあなんであの子が戦ってたんだよ！」

一夏くんは簪ちゃんを見ながら言った。

「お前は何もしないのか」

「これは、簪ちゃんの自信をつける為の戦闘だ。俺は今回は傍観に徹するぞ」

簪ちゃんはゴーレムに今は勝っている。

「さて、簪ちゃんは頑張ったし、これでいいだろう」

俺は『影』を針状にしてゴーレムの手足に突き刺し地面に屈服させた。

「君は無人機なんだよね、ならこれぐらいの事はいいよね」

俺は『影』をギロチンにかえゴーレムの首の所にセットした。

「バイバイ」

ゴーレムの顔は宙に舞った。

「人間だったら楽しいだろうね」

その声はISに乗っている者にしか聞こえなかった。

「帰ろうか、簪ちゃん」

そのままアリーナを後にした。

「頑張ったね。簪ちゃん」

「い、イザヤのおかげです」

簪ちゃんは誉められたのが嬉しいのか頬を赤く染めていた。

「作戦は順調に進んでいるね」

「作戦？」

「とっても愉快的な作戦なんだよね。今は秘密だけど」

俺は寮の屋上に足を運んだ。

「誰もいないね」

俺は携帯を取り出し電話をかけた。

『楽しかった？ イザくん』

「微妙かな、束ちゃん」

『酷いな、愛しのイザくんの為に頑張ったのに』

「それは感謝してるよ。作戦は順調だね」

『そうだね、彼女も待ってるよ』

「彼女は危険だからね。それじゃあ、作戦を第二段階に移行しようか」

『了解（）、』

「それじゃあ、エル・プサイ・コングルウ」

俺は携帯を切りまた、電話をかけた。

『何のようだよイザヤ』

「怒らないでくれよ自称魔法少女ちゃん」

『だれが、自称魔法少女だ!』

「もう、何も怖くないだっけ?」

『それは、違うアニメだ!』

「君の声を聞いて安心したよ」

『/ / / / いきなりなんだ』

「君を使うのは第三段階からだよ、マドカちゃん」

『それだけの為に電話したのか』

「いけないかな? 自称魔法少女ちゃん」

『だから私は自称魔法少女じゃない!』

からかいがあるから楽しいな。

「また、かけるよ」

電話を切り自室に戻った。

「遅かったね、イザヤくん」

部屋に戻ったらシャツ一枚のたっちゃんがいた。

「今日は楽しめたよ」

「目をつむるのは今回だけよ」

その顔はいつもの顔ではなく生徒会長としての顔だった。

「それは困るな」

俺はたっちゃんの顎に手を添えキスをするような格好になっている。

「一応、イザヤくんも生徒会なんだから」

「わかってるよ」

「あなたの狙いはなに?」

「今は君の心かな?」

「真面目に答えて」

「これが、答えだよ」

俺はたっちゃんの唇にキスをした。

「それは、本当のキス?」

「俺は特別好きな人じゃないとしないな」

「あと、何人居るの？」

「今はまだ五人かな？」

「増えるの？」

「俺の愛がある限りね」

そのまま、ベッドに移動した。

## PV6万アクセス記念（前書き）

今回はこの話を作る際にできたストーリーを載せました。人気があればこれを新しく投稿するつもりです

## PV6万アクセス記念

初めまして、森野亮土っス。今回はPV6万記念で作者がこの作品を作った際にできたポツ作品を番外編を使ってもらうことになったっス。

では、『もし、IS学園に亮土くんが来たら』っス。

神様に人生をやりなをさせもらっているんだが、よりによってオカミさんの亮土に生まれ変わってるんだ。編入先がIS学園なんて。

「待たせたな」

そこに現れたのは織斑さんでしたス。

「お、お久しぶりです、織斑先生」

「久しぶりだな、森野」

一応、小学校まで一夏さんと同じ小学校に通っていたんスよ。

「ひい！ 見ないで下さいっス」

「治ってないのか、まあいい時間が押しているから行くぞ」

俺はビクビクしながら千冬さんね後ろをついていったっス。

「ここがお前の教室一組だ。私が合図したら入ってこい」

「はいッス」

千冬さんが教室ですごい音がした。

「何するんだよ、千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

また、すごい音が聞こえ俺は一夏に向かって合掌した。

「今日、編入生が来た。入ってこい森野」

俺は教室に入り教壇に立ち挨拶をしたっス。

「は、初めまして、森野亮土です。趣味は特にないっス」

『ジッ』

「いっいやああ〜見ないで見ないでっ！！ 見ないでほしいっス！」

「意外に可愛いかも」

俺の平穩はどうなるんっスかああああああ！！

転校生で遊ぼうか？（前書き）

修正させてもらいました

転校生で遊ぼうか？

今日は学園の方に登校しますよ。なんでって、ほら今日は二人の転校生が来るからじゃないか。

「遅れました〜ちーちゃん」

遅れた理由は女子の騒ぎ声が聞きたくなかったから？

「イザヤ！ 今何時だと思っている」

主席簿を投げられ頭に直撃した。

「痛いじゃないか、ちーちゃん」

俺は頭を抑えながら席についた。

「珍しいね、イザイザがクラスに顔を見せるなんて〜」

のほほんさんが笑顔で話しかけてきた。

「なんだか、面白いものが見れそうな気がしたから」

「イザイザの予想は当たるもんね」

「パアッン！ 一夏くんがラウラちゃんに平手をされていた。」

「デュノアの面倒は折原と織斑に任せる」

さて、俺は逃げる準備を始めるか。

「頑張つてね、イザイザ」

「まあ、頑張るよ」

一人で教室を出ようとすると。

「イザヤ、一人で逃げるなよ」

一夏くんの手が肩に置かれていた。

「これは、新手のビックリかい？」

「逃がさねえぞ」

結局、三人で更衣室に目指すことになった。

「俺は面倒ごとは嫌いなんだけどな」

「嘘をつくな、事件の中心にはいつもイザヤがいただろ」

廊下を曲がるうとしたら一人の女子生徒に出会った。

「者共であえー」

しょうがない、ここは一夏くんをおとりに使うか。

「シャルルちゃん、舌を噛むなよ」

俺はシャルルちゃんをお姫様抱っこで抱え女子軍団の前まで行き叫んだ。

「生徒会副会長が命じる！俺とシャルルちゃんを全力で通せ！」

「……Yes, my lord!」「」「」

真ん中に道ができ、そこを走りながら呟いた。

「一夏くんは通さなくていいよ」

女子の目は獲物を狩る獣の目だった。

「さて、時間もたつぷりあるからお話しようか。シャルロット・デユノアちゃん」

更衣室にその声は静かに響いた。

「何で、その名を知ってるの」

シャルロットちゃんの顔は青くなっていた。

「俺が折原臨也だから」

「あなたが、情報屋のですか」

「俺のこと知ってるなんて、嬉しいな。これが、君が欲しがってる物だよ」

俺はUSBを取り出し見せつけた。

「欲しいかい？白式、甲龍、ブルーティアーズのデータが」

シャルロットちゃんは頷いた。

「あげるよいらないし」

俺はUSBを投げた。

「あなたは彼らの友達じゃないの」

「なんで、俺が一夏くんの友達になるのかないらつくよ」

「あなたは何がしたいんですか？」

「いいのかい、コレを聞くと君は俺の監視を受けることになるよ」

「止めて置きます」

「でも、俺は君に興味を持ったからよろしく。イザヤって呼んでいいよ」

「わかりました」

「敬語なんてやめてくれよ。それより行くところか、ちーちゃんは怒ると怖いからさ」

シャルロットはイザヤは優しい人なのかと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6851w/>

---

転生した俺はISの世界で折原臨也になった！

2011年9月25日01時53分発行